

安藤 昌益（あんどう・しょうえき）

1、プロフィール

江戸時代中期の医者で思想家。主張の核心は<直耕>と<互性>である。当時は徳川幕藩体制で、二十世紀初頭に狩野亨吉に発掘されて、E・H・ノーマンが世界的に紹介する。

<生没>

1703(元禄 16)年～1762(宝暦 12)年 10 月 14 日

<代表作>

稿本『自然真営道』第一次上梓は、1755(宝暦5年)2月。

百巻九十二冊と大序一冊の合わせて九十三冊である。

<青森との関わり>

1744(延享元)年から 1758(宝暦8)年まで町医者として八戸に居住、社会思想家としても活動を続ける。

2、作家解説

1703年、羽州秋田郡比内二井田村(現在の大館市)に生まれたとみられる。字は良中、号は確龍堂。柳枝軒の文号もあり、正信とも名のる。町医者として 1744年頃から 1758年まで南部八戸に住み、男2人・女3人の5人家族であった。昌益の存在は1908年の狩野亨吉の「大思想家あり」の発表後、1950年のE・H・ノーマンの『忘れられた思想家』によって世界的な社会思想家として知られるようになった。

1758年に八戸から先祖の地である二井田村に戻り、1762年 10月 14日に 59歳で死去。死後に<守農太神確龍堂良中先生>と刻んだ石碑が門人によって建てられた。京都で後世方別派の味岡三伯について医学を学んだが、なぜ八戸に来住したかは不明である。

八戸に居住していた1752年に『統道真伝』5巻5冊や稿本『自然真営道』101巻93冊の執筆を始め、翌年3月に刊本『自然真営道』3巻3冊を京都で出版した。八戸へ来た当初は、天聖寺で講演を行い、博学者として聞こえ、1758年に自分の思想を伝えるため全国からの門人の討論会を開催した。八戸の門人には、蕃医や藩士、僧侶や神官、町人等、城下の知識層が多かった。

思想の特徴は平等性にある。全ての人間は同一な存在であり、〈直耕〉という農耕作業等に従事すべきであるが、現実には差別がある支配社会であり、平等な社会である〈自然世〉の実現を理想とした。幕藩体制の封建社会では厳しい批判にさらされた。また自然と人間は、相互依存の〈互性〉の関係にあると説き、人間の正しい営みを自然の自律的活動や循環の中に見い出そうとした。エコロジーの発想である。社会批判に向かう契機は、1749年の猪飢渴に象徴される悲惨な飢饉であった。刊本には「非命にして死せる者のために」この書を著すと記している。

3、資料紹介

○『自然真営道』

稿本

1755(宝暦5)年2月

百巻九十二冊と大序一冊の合わせて九十三冊からなり、大序、一～九巻、二十四・二十五巻の十二冊が現存。第一三巻が「字書巻」で、その後に六道の批判、二十四巻が「法世物語」で、二十五巻が理想社会の自然世の摸索で、二十六巻以下が本書分で、医学書。

東京大学図書館に所蔵。